# 2012年 立山登山ウォーク

（2012年8月25日）

ゼッケンNo. W443　山猫＠滋賀

## はじめに

今年もＧＷに立山の申込みが届き、当然の如く申込みをさせてもらった。最近は申し込めば必ず参加決定になると思い込んでいるが、後で知ったことで雲峰さんもウォークで落選したとのことだったので、誠意をもってしっかり申込みしないと落選ということもあり得るのだ。

今回、早くに富山駅前の「桜橋ビジネスホテル」を予約しておいたが、届いた参加決定案内を見た瞬間、２時起きは辛いと案内にあった立山駅前の「千山荘」に申込みをしてしまった。正味３時間近くも長く寝られたら、夜の懇親会も元気に飲めることだろう。

行きは毎回、「ヨーロッパ軒」に寄るなり、弁当を注文するなりして、ソースカツ丼を食べているが、今回は福井の「総本店」に寄って本家の味を品定めする計画を立てた。また、雄山山頂ゴールは１２時半頃だと思うので、その後のオプションをどうするか立山のマップを見ながら、あれこれ考えた。

ひとつ目は一ノ越から「浄土山」「室堂山」を経由して室堂平に戻るコース。浄土山の下りは大きな岩がゴロゴロしていて危険と聞いていたので、危険なら戻れば良い。２つ目は「黒部湖」に向かって２００ｍ下った「東一ノ越」まで行き、そこからまた一ノ越まで戻るコース。３つ目は雄山山頂から「大汝山」「富士ノ折立」付近折返しで「立山三山」を制覇すること。何れにしても、当日の状況次第だ。

というようにいろいろ考え、道中も含めて楽しい立山登山ウォークでありたいと計画を立てた。そして、新しい立山の発見を楽しみたいと考えた。

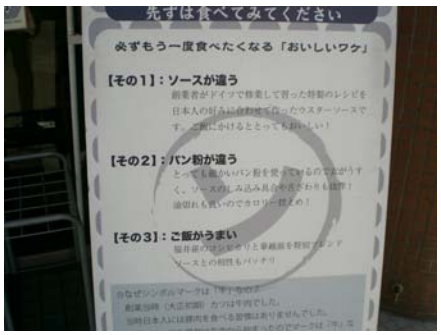
## 前日

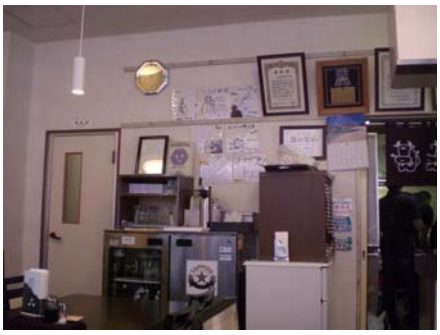
今年も例年通り、青春１８切符を使って富山に向かう。当日は７時前の電車に乗り、琵琶湖線の米原、長浜経由で富山に向かうことにした。長浜付近にあったイオンは閉店しており、久し振りに見る琵琶湖の湖面は薄黒かった。長浜で２両編成の近江塩津行きに乗り換えると社内からはカン高い声の中国語が聞こえ、場所を間違えたのではないかと思えるくらい中国人女性が多く乗っていた。虎姫で降りたので、その付近の工場で働いているのだろうが、みんな背が高かったのが印象的だった。

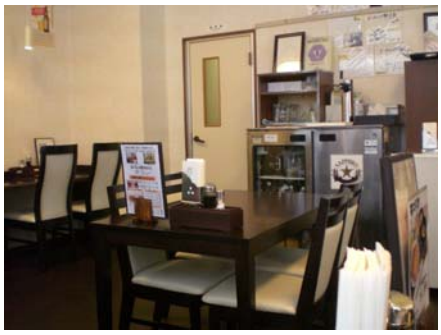
近江塩津で少し時間待ちをしている間、ＪＲの地下道に降りるとそこは真夏でも冷蔵庫のように冷えていて極楽に思えた。今津発の福井行きの電車が入って来て、これも２両編成だった。敦賀に向かう道中だけでなく、敦賀を越えてからも車掌は何度か間違って“敦賀行き”とアナウンスしていた。福井行きに乗ったつもりが、敦賀手前で敦賀行きとアナウンスされるとさすがに間違ったのかと思ってしまう。普通、敦賀発は福井行きや金沢行きだが、何度も間違うと上司に伝わることもあるので注意して欲しいものだ。

少しだけ早いこともあって、湖西線周りの新快速のようなゆとりのない雰囲気ではなく、２両編成ながら、のんびりしていてのどかな感じがする。空席もあり、青春１８切符のグループ組はほとんどいなかった。この間はずっと本を読んでいた。福井には９時５１分に到着。外は日差しが強く、強烈に暑い日に思えた。

電車から降りると駅前は広いが人も車も少ない。地図を持ち、できるだけ日陰を選んでヨーロッパ軒総本店を目指す。ゆっくり歩いて１０時２０分頃にはヨーロッパ軒に到着。狭い交差点の角に店はあった。ドアは開いていたので、ソースかつ丼の注文だけして、すぐ近くにある冷房の効いたアパホテルで時間潰しに読書して開店を待つ。ホテルには新潟の女子高校だろうか、バレー部員が泊まっていたが、みんなボーイッシュな髪型で、男か女かわからないほどだった。やたら背の高い子もいて、いかにもバレーをしているという感じに思えた。







そして、１１時ジャストに「ヨーロッパ軒総本店」に入り、ソースかつ丼を注文。できあがっているものとばかり思っていたが、そうではなかった。時間の掛かるものではないので、タカがしれている。昨年の豊島分店とは違い、丼茶碗だったが、丈は薄くてご飯も少なめだった。数年前に食べた敦賀駅前店の半分くらいか。箸を付けるとやっぱりソースカツが香ばしくて美味しい。腹も減っていたので食べるのに１０分も掛からなかった。店内には壁一面ビッシリと多くの色紙が飾ってあり、タモリ、鶴瓶、葉加瀬太郎、渡辺徹・榊原郁恵夫妻などもあった。取材の関係か、テレビ局のキャスターも多かった。何れにしても日本のソースカツ丼の元祖であるヨーロッパ軒総本店に行けたことに満足した。

店を出た後は、また一段と強くなった日差しの中を福井駅に向かう。駅前通だが、やっぱり車は少なかった。駅で缶ビールを買って、１１時４７分発の金沢行き電車に乗る。つまみは持参していたので、汗をかいた後の５００ｍｌ缶ビールは冷たくて美味しい。この車両には１００分近く乗っていたが、ＪＲ西日本の新人機関士の訓練の最中で運転席には４人いた。大きな声を張り上げて訓練する新人機関士の声が車両全体に響き、良きに付け、悪きに付け、福知山線脱線事故で話題になった「日勤教育」が頭を過ぎった。安全の指差し呼称でも声を出して安全を確かめる。確かに声を出すことは大事だと思うが、指差し呼称も大事かもしれないが乗客の安全が第一、これしかない。声を出す精神教育は二の次だと思うが、安全より声出しになっているように思えてならなかった。

金沢には１３時２４分に到着。同じホームの一番端から黒部行きが出ていたので乗り換える。先ほど訓練中だった２名はホームで敬礼をしながら、また大声を出して報告をしていた。大声を出すことで運転への集中が疎かになるのではないかと改めて思えた。

黒部行きは１３時４２分で横一列の座席に座った。外は日差しが強烈でムチャクチャ暑そうだ。推理小説は益々面白くなっていた。そして、１４時３７分に富山駅に到着。駅構内は北陸新幹線工事でもの凄く大回りさせられた。外に出ると強烈な日差しでフラフラするくらい。陽を避けようにも工事で避ける場所もなく、ただただ遠回りするのみ。普通より４～５倍歩いて、地鉄ホテルのロビーに到着。やっと座れるという感じだ。Ｉ井さんとＫ村さんはすでに到着されていて、１５時の受付待ちだった。私は明日朝に立山駅で受付するので、ここはパスだ。ただ地鉄の立山行きまでは１時間以上の時間待ちがあったので、２人と一緒にくつろいでいるとＮ谷さんが到着。

地鉄ホテルの１階に降りて、地鉄・富山駅に歩いていると笑顔のこがみちゃんが受付に到着。一瞬だけ会えた。１６時５分の立山行きの電車に４人で乗る。沿線は田舎で近江鉄道の沿線に良く似ている。売店で買った缶ビールを飲みながら立山駅を目指す。途中、芦峅寺にある「立山大橋」を真横に望むところで電車は止まり、説明があった。そして、１７時８分に立山駅に到着。同じ電車には関東のＫ藤さんも乗られていた。Ｉ井さん達３人は駅前の「千寿荘」に泊まられるので別れる。

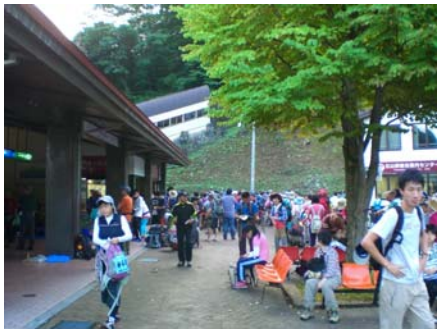
路面は濡れており、雲も掛かっていたので、いつ雨が降り出してもおかしくない天候だった。ここまで来ると富山駅前とは違って、山の天気だ。それにしても湿度が高く、ムシムシする。そして、宿泊する「千山荘」に到着。何回か電話したが、いつも年配の女性が出られた。宿の中に入ると年配の女性が経営されているみたいで、中年女性と２人でやりくりされているみたいだった。本日の宿泊は立山マラニック参加者のみだった。部屋は兵庫の男性と東京の男性と同室だったが、名前はわからない。共に過去ウォーク参加経験者のようだった。兵庫の方とは同じ関西なので、いろいろと世間話をした。

雰囲気から夕食はあまり期待していなかったが、好き嫌いの多い私向きではなかった。みんなひとり参加のようで、黙って黙々と食べる夕食だった。風呂は故障しているようで、隣のホテルの温泉を使えた。肌がニュルニュルになる泉質で温泉は良い。夜中も部屋の窓は開けられたままだったが、それほど寒くもなかったものの、朝方になると少し肌寒くなっていた。ただ、布団がせんべい布団みたいで痒くて気持ち悪かった。

## 当日朝

前日はひと言ふた言しか話をしなかった東京の人のイビキがうるさくて、何度も目が覚め、３回ほどトイレにも行った。一応、睡眠薬も飲んでいたが、初めての立山駅前での宿泊と初対面の人との同部屋で気持ちの高振りがあったためか、睡眠薬も効いてくれなかった。

当日朝はうるさい音がして４時半に目が覚め、シャワーして朝食を食べる。朝食には嫌いなタラコや昆布巻きが出ていたが、幸いにも目玉焼きがあったので助かった。支度をして５時半に立山駅に向かうと、切符発売が６時のケーブルカーを待っている人の固まりがあった。昨年と比べて圧倒的に人の数は多い。どうして何だろうか？。受付を済



ませてから、ウェアにゼッケンを付ける。暑いだろうなぁ～と思った。立山駅構内を覗いても人の数はかなり多かった。この時点でウォーク参加者達はそんなにも多くなかった。

駅の横にある千寿荘に泊まられていたK村さん、Ｉ井さん、N谷さんの姿が見えたので写真を撮る。N谷さんのシューズは何と地下足袋だった。確かに八郎坂には良いかもしれないが、全体的に底裏の薄い地下足袋ではアスファルトを長く進むと足には堪えるのではないだろうか。

ふと横を見るとW穂井さんの姿があった。マラニックに申し込まれていたが、ウォークに変えられたようだ。第一回から１５年連続参加はW穂井さんだけかもしれない。この夏は東北のステージレースに参加したが、４００ｋｍのうち、３５０ｋｍくらいは歩いただろうと話されていた。「今年は何缶ビール飲まれます」と問うと笑っておられた。６５歳とはとても思えない、１０歳は若く見える元気な方で、すっかりさくら道で知り合いになってしまった。かつては遠い存在だったが、今は近いと感じる。

説明が行われ。「絶対に歩かないように・・・」と念を押された。説明はいつもこの方がされるが、メリハリがあって、わかりやすい。

## 大会道中

松原さんの「エィエィ、オー」の掛け声で６時３０分わずか前にウォークはスタートした。スタートして１分過ぎに地鉄の踏切に差し掛かろうする直前に警報機が鳴り始め、否応なしに足を止められた。今回のウォークは我れ先にとばかりに勢い良く歩き出した人が何人もいて、先頭グループ１０数人くらいは踏切に引っ掛からず、そのまま差を広げて橋に掛かっていた。

橋上から写真を撮ると砂防提から落ちる水がソーメンに思えるほどきれいだ。今年の称名川は水が少なそうに思えた。真正面から霞が掛かったような中を強い日が差し込んで暑そうな予感がしてきたが、この時間帯なら、まだ日陰も多いことだろう。

過去２回と違って、前が見えなくなるほどペースは速い。ウォークなのに走っている人がいるのではないかと思えるほどだった。どう見ても、この差はウォークでは考えられない。以前の私なら走りたかったと思うが、最近はそこまでして走りたいとは思わなくなっていた。

毎度のことながら、先に何段も見える堰から落ちる糸のような水の流れに差し込む朝の日差し、清々しい気分になる。スタートして３０分弱、ログハウスレストラン「クムジュン」前を通過する。クムジュンはひとつの目安だ。後ろを振り返るとまばらな人影となっていた。こ

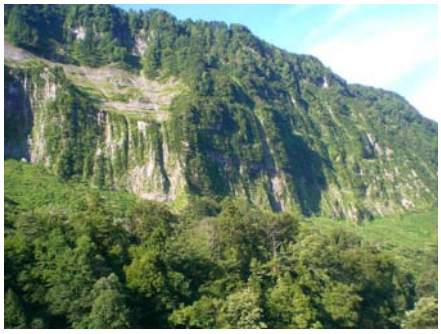
れがウォークなのかという感じになりながらも、先を急いでいる自分の姿もダブった。前方に見える悪城の壁に太陽光が差し込んでいた。相変わらず、堰から落ちる糸の如き水の流れは素晴らしい。

右の遥か頭上に圧倒される「立山有料道路」が見え始めた。人の力は大きい。立山有料道路入り口ゲートのある「桂台（４．１ｋｍ）」標高６６３ｍは７時１０分に通過。ここにエイドがあったが、その手前の冷水で顔を洗い、水を口にしてエイドはパスした。過去２年より足が重いようで、思うように進んでいないような気がする。何度も称名川を見るが、今年の水

は極端に少なく、これだと室堂平の雪も少ないのではないかと思えた。ここで思ったことは現地に行くと全然違っていたが・・・。

悪城の壁がだいぶ近付いて来て、朝の陽光が岩にへばり付いた緑を鮮やかに照らしている。左には「悪城の壁展望台」の表示があった。７時１９分頃にマラニックの先頭ランナーに抜かされる。先頭に抜かされた時間は昨年より１０分早い。私のウォークも若干遅いが、それでも２ｋｍくらいの差はあるだろう。抜いたあと１００ｍほど先で先頭ランナーは歩いていた。息遣いからして、目一杯の走りにも思えた。

北陸電力の「称名川第二発電所」



を過ぎ、右を見ると鮮やかな「悪城の壁」が見えた。見事な１枚岩だ。段がすっきりしていて、今までとは違う岩に思えた。そして、１３％勾配の洞門に差し掛かる。この坂の厳しさは格別だ。今年は前にもウォーカーが見えない。先頭はどこまで速いんだ。１３％洞門はいつも前屈みにしないと上れない。はっきりいって、山登りだ。ここまで、今年は日陰が多かったように思われた。気のせいではないと思うが、ど

うしてだろう？。

称名滝駐車場の看板が見え出すとエイドはすぐそこだ。スタッフからゼッケン番号と名前を呼ばれる。ウォークなのに「頑張って」と掛け声を掛けられると恥ずかしい気分になる。「称名エイド（７．０ｋｍ）」には７時４２分に入る。

昨年より４分遅かった。大勢のスタッフに迎えられ、エイドでは冷たいタオルを手にして、生姜の入ったソーメンや梨、水分を頂く。夏場は水分をたっぷり含んだ梨が一番美味しい。エイドは２分弱で立ち去り、先を急ぐ。競争でもないのに急いでしまうのは過去からの習性だろう。

すぐ先にある冷たい湧き水で顔を洗い、ペットボトルいっぱいに水を入れて、八郎坂に上る準備をする。眼下の称名川の水は例年と違って本当に少なく、堰から落ちる水もごく僅かだ。路面に称名滝までの

表示板があった。標高は１０３５ｍ、５００ｍ上って来たことになる。後ろからゼッケンは付けていないが、デイパックを背負って走って来たランナーらしい人に抜かれた。大会に混じって走っているのだろうか？。左に「大日岳登山口」の表示があり、真正面に飛竜橋が見える。昨年は見られた水量の多い時だけ現れる落差５００ｍの「ハンノキ滝」の姿はなかった。ここか

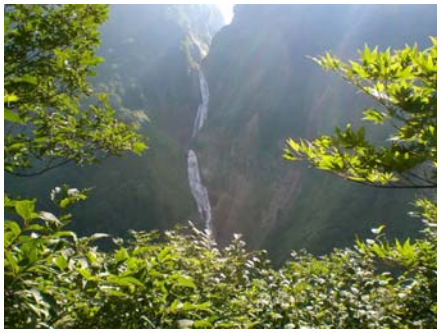
ら称名滝は見えない。

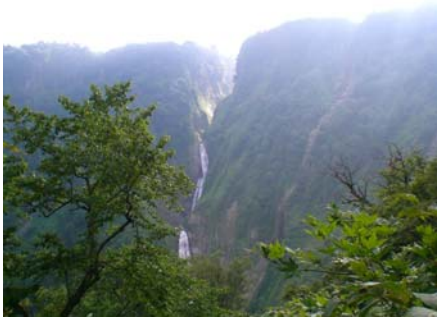
右に折れて称名川に掛かる「飛竜橋」を渡ると八郎坂と刻まれた石碑がある。ここからが難所の「八郎坂」で、７時５５分に上り始める。弘法まで２．４ｋｍで５００ｍ上っており、気を抜けない区間だ。１７日の土砂崩れで一昨日までは通行止めだったが、大会に間に合うよ

うに工事が施されたかのように、昨日から通れるようにしてもらえたことは有り難い限りだ。

登山道は濡れておらず、足元の滑りやすさは凌げる。しかし、滑り易い黄緑色のコケに覆われた石や岩も多く、細心の注意を払う。最初は快調に上れたが、しばらく経った頃から、かなり苦しく感じるようになっていた。足も重い。徐々に汗が流れ出し、ウェアも上はビショビショ、下の半パンにまで流れ出す。いつもの如く帽子の日差しからは汗がボトボトと落ち、手に持ったタオルは汗を拭いては絞りの繰り返しだ。

最初にうちは何人か抜かせたが、徐々にマラニック上位組や後続のウォーカーにも抜かれるようになった。苦しいながらも辛抱して進んでいると最初ずっと前にいたオレンジ色のウォーカーを抜かす。昨年女性トップだったウォーカーも抜かす。この女性は上りが極端に弱いみたいだ。汗まみれの手ではなかなかカメラ撮影が難しく、写真撮影はできるだけ減らすようにした。それでも称名滝の写真は数ヶ所で撮った。標高１２７０ｍでの撮影はきれいに撮れた。上るに従って路肩が落ちていたりし、危険な箇所もあった。苦しくて膝に手を置いて上ることもしばしばあった。どこも気を抜けないところばかりだ。展望台でないところで写真を撮るとネハンの滝が現れた時の水路がはっきりと見えた。





２／３ほど上ったところで土砂崩れ箇所に出くわした。上の土手が完全に削られたような状態で、複数のスタッフから、「上に猿の集団がいて、土砂を落とすので注意して下さい」と声を掛けられた。私が通過した時、猿は見えなかったが、見た人も多くいたようだ。足元は土袋が敷かれて通れるようになっていたが、ここが通行止め区間だったようだ。疲れているので慎重に慎重に上って行く。この付近から弘法まではほとんど後続の姿はなかった。

残り距離が少なくなった頃、いつもいて下さる場所で今年もスタッフの姿が見えた。「水はどうですか？」と言われたが、ペットボトルにあったのでパスさせてもらった。スタッフはこの先にもいて下さり、急な上りが終わると立山有料道路を走るバスの音が聞こえてくる。土の地道を少し行くと階段の向こうに立山有料道路が見え、間もなく弘法エイドだ。ここに「八郎坂下山口」の表示があった。難所の八郎坂を上り終えるとひとまずホッとする。ここからは一昨年同様に左側の木道を迂回して弘法エイドに進む。昨年の木道は荒れており、草刈りもされていなかったので車道を進んだが、今年はコースが元に戻った形だ。それにしても木道は傾いていて、進み難い。

標高１５８０ｍの「弘法エイド（１０．８ｋｍ）」には８時４９分に到着。苦しかった割に時間は掛かっていなかった。エイドで水を頂こうと思ったが、生温かったのでパスして、梨とゼリー、初めて抹茶を頂いた。抹茶は冷えていて美味しかった。普段からお茶をほとんど飲まないので、少しカルチャーショックを受けた。この時、ウォークでは７番目くらいだった。マラニックも同じくらいの順序ではないか？。木道に入る前の広場に富山

テレビの撮影用リモコンヘリがあった。これに付けた小型カメラで上空からの撮影をするのだろう。

スタッフの指示に従い、再び木道を進む。約２．５ｋｍ先の「追分」までは木道が続く。この間に何度か立山有料道路に出て、再び草原に入って行くことになる。弘法まで来ると風は冷ややかで気持ち良い。

例年よりは日差しが弱く、凌ぎやすく感じる。昨年は草刈りされていなかった木道周辺だったが、今年は全然違ってきれいに整備されていた。昨年はできなかった理由があったのだろう。ガスが少し流れてくると気持ち良い冷気が汗をかいた身体の熱を摂ってくれる。緑の草原が鮮やかだ。右手には「薬師岳」の姿も見えた。木道のＴ字路があり、ここで左折すると木道は終わり、立山有料道路に出る。

道路脇の草や花の写真を撮っていると後続のウォーカーから、「そんなに歩くのが速いんだったら、マラニックに出られたら良いのに」と言われ、「楽な方が良いですから」と返事する。話し掛けた参加者はマラニック参加者なのに当日ウォークに切り替えた人で「あんたに言われる筋合いはない」と心で思った。

「追分料金所」を過ぎると大きなヘアピンカーブがあるが、その手前で中年の散策グループとすれ違い、挨拶する。

カーブを曲がった頃から大きな声援が聞こえ、ゼッケン番号から名前を何度も呼んでもらえた。弥陀ヶ原エイドはすぐそこだ。エイド手前には走友会の大きな応援垂れ幕が掲げられていた。地元・富山の走友会のようだ。このエイドは黄色の前掛けをした方々が迎えて下さっ

た。塩の付いたキュウリ２切れとチョコレートを頂いた。このエイドの水分も生温く、嘔吐きそうで飲む気になれなかった。「水を補給しましょうか」と言われたが、「この先のバス停の水道からは冷たい水が出ますので、そこで補給します」と丁重にお断りする。これは毎回のことだが、この先、室堂まで雲が切れると暑いのでスタッフの配慮だろう。

エイドから２、３分進むと「弥陀ヶ原ホテル前（１５．０ｋｍ）」が標高１９３０ｍの弥陀ヶ原バス停だ。９時４０分に到着。立山有料

道路沿いでは唯一のオアシスである待合室に入り、ペットボトルに水をいっぱい補給し、頭から冷水を被り、顔を洗う。１０℃以下だと思われる水温は室堂の水よりも冷たいと思う。上り側と下り側、共にバス待ちの人が１０人以上いたが、何人かの方から声を掛けてもらった。

辺りは少しガスが掛かって、涼しくなっていた。ちょうど汗も出ない程度の涼しさだ。バス停から出てコースに戻り、少しすると先ほどマラニックに出ないのかと声を掛けられたウォーカーとオレンジ色のシャツを着たウォーカーの話し声が聞こえた。すぐ後ろにいると周りに騒音がないので声がまともに聞こえる。この光景は室堂手前まで続いた。２人は関東方面からの参加者のようで、年配のオレンジシャツの男性がいろいろ経験話や大会の話をしている。夫婦共々ランナーだとか、ニューヨークシティに１０年連続参加したとか、東京マラソンは凄いが一度も当選したことないとか、聞きたくなくても聞こえてしまう。ウルトラのベテランはあまり自慢話をしないように思うが、フルなどを中心に走っている人の方がタイムや参加した大会のことなど経験の浅い人や聞く側に回る人に話したがるランナーが多いように思う。このウォーカーもそのひとりのように思えた。

長く蛇行が続く立山有料道路で一番長くきつい弥陀ヶ原から天狗平の間は時間が止まったような感覚になる。眺めは良いのだが、緑の草原と山々のみが見えるだけで室堂平のような急激な変化がないので、飽きてしまう。この飽きが辛さを増すのだろう。上りではなく平坦であっても辛さは変わらないのではない

か。ガスは低く垂れ込めてきて、腕が肌寒い。ただただ写真を撮りながら、黙々と必死で歩くのは毎年のことだ。そんな中、マラニックの上位組が時折抜かして行く。彼らも歩いたり、走ったりを繰り返すのみで表情は動かない身体を必死で前に進めている感じだ。

弥陀ヶ原から１０分あまり歩いた頃、ガスが一面に立ち込めるようになってきて、更に涼しさは増した。個人的にはこんな状態が続いて欲しいと思う。気温が下がっているので、苦しいものの、快晴時と比べるとはるかに楽だ。周りが何も見えない状態で進むのもなかなか面白い。弥陀ヶ原通過から３０分ほど経過

すると大日岳、奥大日岳に掛かっていたガスが少し切れ始め、青空も覗き始めた。今回は道路脇に生えている草木にもできるだけ目を向けるようにして進む。しかし、何という名前の花か、さっぱりわからない。

その内に陽が差し始めた。強い光ではないが、上っているので汗がにじみ出てくる。２２３０ｍの「鏡石」に到着。その前、２０３０ｍの「美松坂」の看板には気付かなかった。鏡石の看板は草むらの中で標高は隠れていた。そして、頭上の鏡石も草で半分ほど隠れて

いた。草原の中を進み、通って来た眼下を振り返るとヘアピンカーブの連続であることがわかる。そんな時、先ほど抜かされたマラニックランナーが道路のすぐ脇で小便をしていた。「いくら何でも霊峰・立山を前にした国立公園の道路脇はないやろ！」と思ってしまった。少しでも中に入るなりして欲しいものだ。

昨年はこの辺りでがっつくんに抜かれたが、今年はがっつくんの姿はなく、調子が悪いのかもしれない。周辺山々に掛かっていたガスは徐々に切れて行くが、雲の流れは早く、黒い雲も立ち始めていた。左前方には雷鳥沢から流れ出している称名川のＶ字谷が鮮やかだ。その手前には地獄谷から落ちる２２７０ｍの「ソーメン滝」の姿もある。ここではいつものことだが、立ち止まってソーメン滝を眺める。

すぐその先は２３００ｍの「天狗平（２０．７ｋｍ)」は１０時４１分に通過。弥陀ヶ原から１時間掛かった。「立山高原ホテル」も「天狗平荘」も耐震工事をしているのか壁伝いに足場が掛けられていた。その先の広場では弘法で見たリモコンヘリが置かれていた。横に除雪車やドラム缶もあり、豪雪地帯の風景だ。右側の山は下の方には、凄い数の小振りの岩が敷き詰めたように点在していた。ここだけの風景で、どうしてこんなに岩が多いのだろうか？。

真正面に「ホテル立山」が見え、その手前のくぼ地には雪溜まりが見える。ボヤっとした感じにガスっていて、前方の雄山の上の方は何も見えない。道端にも岩の上に大きな雪渓があった。ここから見る限り、今年は雪が多かったみたいだ。２３９０ｍは「大谷」だ。ＧＷには１０ｍ以上におよぶ雪の壁となるあの「雪の大谷」の場所だ。ここまで来るとホッとする。

前には室堂エイドのテントも見え、多くのスタッフの姿も見えている。エイドの手前ではスタッフが等間隔で並んで、「ヤマネコさん、お疲れ様」と何度も何度も多くのスタッフが名前を呼び、迎えてもらえるのは毎回のことだ。いい大人だけに大きな声での声援は少し恥ずかしい。スタッフにお礼を言いなが

ら、エイドに入る。

「室堂エイド（２２．８ｋｍ)」到着は１１時４分で昨年より４分遅かった。いつも通り、梅干し抜きのおやゆっことバナナ、水を頂き、足早にエイドを後にする。ここの水も生温かったので、ペットボトルへの補給は差し控える。スタッフから「雄山頂上はガスで気温が下がっているので、雨具かウインドブレーカーを必ず持参して下さい」と言われた。

室堂バスターミナルにはいつもよりも数多くのバスが停まっているように思えた。上の方から「立山玉殿の湧水」を見下ろすと人盛りができている。前方にはガスが掛かっていて、ガスが通り過ぎるとかなり肌寒い。雪渓があちこちにあり、昨年の倍ほどあるように思われる。立山に夏に来るとその冬の積雪量が多かったか少なかったか何となくわかるが、平地にいるとわからないものだ。

ひとつ目の雪渓は登山道まではは み出していなかったが、これがいつもの雪渓かどうか、全くわからない。気のせいか登山道の幅がかなり広くなったように思え、ずっと違和感を持っていた。前が見えなくなるようなガスが通り過ぎたかと思うと晴れ間が見え、またガスが通り過ぎて行く、そんな天気だった。昨年と比べると天候の関係か、人が少ないように思えた。２つ目の雪渓は行きと帰りの通り道が別れていたが、これがいつもある雪渓だ。上る方はランニングシュースでも楽に進める。その先は先が見えないほどのガスで先が思いやられる。

「ケルン」が見えた。ケルンという名前も８回目にして初めて知り、一種の山の道標のようなものらしいが、見方によっては神殿にも見える。昨年と比べると出会う人の数は半分程度に思えてならない。その分、進みやすいことにもなる。僅かに顔を出した青空の下に一ノ越が見える。遠そうで、実際はそうでもない。周りの雪の多い風景を見ながら、必死で上って

行く。一ノ越手前のジグザグしながらの急坂はさすがに息が上がりそうになるが、何とか辛抱できた。そんな時、幼い子供を胸に抱っこして一ノ越を目指して上って行く母親を見た。隣には夫らしき男性がいたが、まさかこのまま雄山まで上ることはないだろう。戻る時の一ノ越の下りも相当強烈で、これは全く常識外の行動としか言いがたく怒りを覚えた。そして、上を見上げながら雄山山頂ゴール後のオプションのことを考えていた。

頭上からはスタッフの賑やかな声援の声が頻繁に聞こえる。最初は「ヤマネコさん、頑張って」だったが、いつの間にか「かおるちゃん、頑張って」に変わり、それがうるさくて雑音に聞こえ始めた。周りの登山者の目からすると、そういう光景はどう映るのだろうか？。笑いながら応援されるのはあまり良い気分ではなかった。

２７００ｍの「一ノ越」には１１時４３分に到着。スタッフから蜂蜜と梅干しを混ぜ合わせた物を勧められたが、梅干しは苦手なので丁重に断る。そして、間髪を入れずに雄山山頂を目指す。頂上まではあと標高差で３００ｍ上らないといけない。

一ノ越には多くの観光客や登山客がいた。下から見上げると今年は昨年ほどの混みようではないように思えた。ガスが出始めると気温が下がり、ガスが切れると青空が見えて若干温かくなるという気象の変化の繰り返しだった。人のいないところを上るようにしたが、前がつかえると後ろの登山客から「ランナーが来ましたので開けてあげて下さい」と丁寧に言ってくれる人がいて、非常に上りやすい。子供や初心者登山者がいるとランナー何てお構いなしなので、開けてはくれないのは仕方ない。

振り返って真後ろの「龍王岳」や「浄土山」の凹んだ部分には多くの雪渓が残っていた。この時点でのオプションは浄土山から室堂山、そして室堂平を予定していたが、雪の多いのが気になった。どこを見て

もあちこちの凹んだ場所は雪渓だらけだ。マラニック参加者が後ろから追い付いてくると場所を譲った。ここまで来ればマラニックもウォークも変わりない。

「二の越」まで来ると大パノラマになるので、ガスの中でもひと休みして眺めを満喫する。上を望むと雄山山頂休憩所がそこまで迫っていた。長居せずに残り１００ｍを目指す。下から眺める限り、昨年と比べると人は少ないと感じる。青空が見えたかと思うと急にガスって来て、辺りは少し暗くなったりし、不安定な山の天気がそこにあった。ここからは人が上らない右側を進む方が楽だ。岩の上りでランニングシューズは靴底のグリップが利くので、人の通り道になっていない岩場の方がスイスイと上れる。

少しすると「女性トップが来られましたので、前を開けて上げて下さい」という声が後ろから聞こえた。真っ赤な上下ウェアの女性トップは足も真っ黒に日焼けし、見るからに精悍なランナーで私も前を譲った。彼女も最後で今までの頑張りの反動か、かなり足腰の動きは重く感じた。そんな女性ランナーに刺激されて最後の頑張りを見せるといきなり山頂休憩所前に出られ、歩いてゴールテープを切る。時刻は１２時１５分で、所要時間は５時間４６分。昨年より２分遅いだけだった。その頃の山頂がガスで覆われて少し肌寒く、眼下には何も見えなかった。

## 雄山～大汝山～富士ノ折立～雄山

雄山山頂はいっぱいの人で溢れていた。コースは決めていないが、オプションの関係で時間がないので、すぐに雄山神社峰本社でご祈祷をして頂くための順番待ちをする。整理係の若者が「狭いので詰めよ、詰めよ！」とうるさく言う。まだ早い時間帯なので一般登山客も多かったが、１回の入替待ちで済んだ。待ち時間の間で雷鳥沢方面の写真を撮るが、あちこち雪渓だらけだ。

そして、３００３ｍの「雄山神社峰本社拝殿前」で宮司さんにご祈祷をして頂く。毎度のことながら、山頂でもあり、いろいろな人がいるのでざっとしたご祈祷ではあるが、今年は昨年のように“岩をよじ登

り”のフレーズはなかった。ご祈祷をしてもらおうとしているのに帽子を取り、手袋を脱ぐことも知らない若者もいた。それが現在人かもしれない。３００３ｍに登ったという証の石碑の写真を撮り、峰本社を下りて行く。今はしっかりした手摺りがあるが、数年前まではなかったので、なかった頃はかなり怖かったことを思い出す。

紫が鮮やかか「イワギキョウ」を撮り、山頂エイドで温かいコーンスープを頂いていると誰かが「ＧＯさん」と呼んだ。誰が呼んだか定かではないが、ふと左隣を見ると何とあのＧＯさんではないか。このような場所での再会に驚きとただただ嬉しさが込み上げてきた。記憶の中では今から９年前、２００３年９月の甲州夢街道の際、朝５時頃に下諏訪の宿へ２００３年に自らが撮影されたさくら道ウルトラのビデオテープを持ち、はるばる埼玉から夜中車を走らせて、さくら道参加者が甲州夢街道に参加されているだろうから、誰かに渡したいとの一心の思いで宿に持って下さった時に会って以来だと思う。

以前はメールも時々していたが、最近はすっかりご無沙汰だっただけに余計に感動的だった。お会いすると必ず手を差し出して、相手の手を力強く握られるのが印象的で、今回は１０回以上握手した。そして、私にしては珍しく笑顔の写真が撮れた。

同行のＦ川さんと本日、暗いうちに出発して剱岳に登られた後、立山マラニックの応援に雄山に寄られ、その後に剣山荘に向かうと話されていた。ほんの束の間の時間で、ＧＯさん達の通られたコースはわからないが、もし１分違っていたら再会できなかった、そんなタイミングだった。

同行のＦ川さんは数年前の立山マラニックで女子トップゴールされた実績のある方で、Ｆ川さんも何故か私の名前を覚えて下さっていて、かつて雷鳥荘でＧＯさんのことを話したような気もした。２００６年は下痢がひどく称名で止めたが、その時の参加記を見るとこのように書いている。“波多ママの隣で話されていた小柄な女性は昨年１位、今年２位の千葉のＦ川さんで、私が名前を言うと「名前は知っている」とおっしゃって驚いた。無名の筈なのに・・・。ＧＯさんと知り合いらしく、その筋から知って貰ったのだろう”と書いてあった。

自己満足以外何でもない参加記を毎回詳しく書いているが、過去を振り返った時は役に立ってくれることもある。山小屋は早いので、すぐに尾根伝いに真砂乗越から剣山荘に向かうと言われたので、大汝山まで一緒に行き、そこで別れた。その瞬間、登山靴ながら疾風の如く２人は走り去って行かれた。その後ろ

姿を見てＧＯさんは格好良かった。

雄山から大汝方面は１本道でランニングシューズでは危険、雄山に上るのとでは訳が違った。わずかな下りでも下手すれば滑落するので、もの凄く気を遣う。岩の上に上って写真を撮っている人の姿があったが怖そう。「大汝山」は２回目の登頂で前回よりも高く上がれた。その先も大きな雪渓があったりした、物珍しい光景ばかりだ。雪渓の上を雷鳥が歩いているようにも思えた。

「富士ノ折立」は先の尖った山なのでパスしたが、登山道からは黒四ダムと黒部湖も見え、後立山連峰が目と鼻の先に思えた。富士ノ折立に上ればもっと黒四ダムがきれいに見えたと思う。岩の中から薄黄色

のリンドウが目に止まる。「トウヤクリンドウ」だ。そこから先は狭くて長い下りで、この辺りになると３０００m級を上り下りしているので、酸素が薄いことを実感し、長くいると心配な面もあった。

下りは岩が少なく砂道のような感じでランニングシューズではブレーキが効かないので怖々下って行き、大走り分岐の手前の「内蔵助カール」のいくつもの大きな雪渓が見えるところで折り返した。内蔵助カールの雪渓は今までに見たことのある雪渓とは規模が違い、きれいで圧倒される雰囲気がある。尾根に差し掛かる少し手前だった。雄山までは誰でも上れるが、それ以降は登山靴の世界で登山者も激減し、山を知らない者は心細くなる。そんな中、小さなケルンが目に付く。

弥陀ヶ原で補給以来、水分は補給できていないのでペットボトルの水も残り僅かとなった。「大汝休憩所」の前では１０数人の登山者が休憩し、缶ビールを飲んでいたので、中に入って買おうとしたが人の姿もなく、自販機もなかったので生憎パスせざるを得なかった。ついでにトイレも借りたが、山ではトイレを借りると１００円支払うとなっており、この時は小銭がなかったので投入することができなかった。

富士ノ折立辺りからは雄山に向かう方が進みやすかった。立山三山の尾根からは室堂平では絶対に見ることのできない迫力ある山の姿が見られた、特に大きな雪渓がいっぱいあって、その迫力に圧倒される。これも山の魅力だ。

## 雄山～雷鳥荘

約２時間掛けて、雄山に戻って来るとうずらさんと babi さんはすでにゴールされていた。２人とも着込んでいて寒そうだったが、私にはちょうど良い具合の涼しい気候だった。まだゴールしていないやっほ～さん、こがみちゃんを待つ。ペットボトルは空っぽで水分補給のために缶ビールを買ったが、何とアサヒのドライでも、水のペットボトルでもサイダーでも全て５００円で、何とわかりやすい商売かと思った。物の価値ではなく、全て同一料金というシステム、山だから通用するのだろう。

そんな時、やっほ～さんが上って来られ、関門２０分前の１４時４０分にゴールされた。その姿はかなりの疲労困憊状態だった。２００４年、初めて立山に参加した時、一ノ越手前で息が上がり、半ばフラフラになって前に出ない足を必死で押し上げているとゴールして戻って来られたやっほ～さんとすれ違ったのは１４時だった。その時はまだ面識がなかったが、怪速亭のシャツを着られていたので判った訳だが、やっほ～さんといえばあの時のイメージが頭に焼き付いているので、今日の姿は信じがたい光景だった。考えてみればあれから８年、やっほ～さんは私と同い年。その分、年月が経過していた。

こがみちゃんも間もなくやって来るだろうと待っていたら、「室堂関門８分オーバーで通過できず、リタイア」とのメールが入っていたので、すぐに下山することにした。まだ、どんどん上って来る参加者達のゼッケンが見える。関門はもうすぐなので急がないと時間はない。「ゴールはすぐそこですので頑張って下さい」と声を掛けながら励ます。うずらさんは下りが苦手と言われたが、かなり足元を気にされている様子だったので、うずらさんに合わせて下りて行く。１５

時を回ると下山者が一気に減る。下山者の数が減ると場所を選ばすに降りられる。

先に降りられたやっほ～さんの姿はいつの間にか視界から消えていた。半ばまで降りると上って来るゼッケンを付けた人の姿はなかった。室堂平のパノラマを見下ろすとミクリガ池、登山道にあった雪渓などがよく見える。どこをどう通ってきたか、雷鳥荘への道のりもよく見える。緑の中に幾つもある雪渓は本当にきれいだ。ガスっていた空は一ノ越が近づくとまた青空に変わっていた。下山すると「イワツメグサ」が目に止まった。

山頂でビールは飲んだが、喉がカラカラだったので「一の越山荘」でペットボトルを購入すると、ここでは３００円。高さで値段格付けされるかもしれないが、何とも言いようがない値付けだ。うずらさん、babi さんと３人でゆっくり室堂に向かう。青空で陽が差しており、半袖、半パンでも寒くはないが、時間

は１６時前だった。登山道脇の草花を見ながら進む。雪渓に差し掛かった時、下りで滑り易いので腰を降ろして滑って行ったが、少し危なかった。

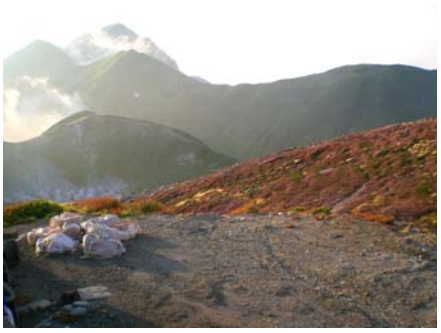
「ミヤマゼンコ」「ヨツバシオガマ」を撮る。そんな時に上を見上げると真っ青な雄山山頂上に飛行機雲が伸びていた。良いことがありそう、であれば良いが・・・。そんな時、脇に咲いていた白い花の写真を撮られている人がいた。うずらさんから「チングルマ」の花と教えられ、私も写真を撮る。チングルマの花は初めて見た。茶色の実となったチングルマはかなり見たが、花は初めてで感動した。振り返っては絵に描いたような立山三山の大パノラマを見ながら、室堂エイドに到着した時、もう１６時４５分になっていた。

バッグを肩に掛けてホテル立山の階段を上り、「立山玉殿の湧水」前で湧き水をペットボトルに注ぐ。その前にうずらさんからエネルギー切れ状態だったのでショコラをもらった。固形物は６時間ほど何も食べていなかったので美味しかった。上っては下り、また上るのアップダウンを繰り返す。「みくりが温泉」横から「地獄谷」に行けるが、火山ガス中毒の事故発生リスクが高まったため、現在は通行止めになっていた。ミクリガ池や違う角度からのまた違った立山三山、「血の池」は今までで一番鮮やかなグリーンでゴル

フ場の芝みたいに思えた。しかし、雷鳥荘手前から周囲の草木が茶褐色に変色し、雷鳥荘前は真っ茶だった。何だろう？。３０分掛けてやっとの思いで１７時２０分に雷鳥荘に到着。手前でこがみちゃんのお迎えを受けた。タイムのゴールは雄山だが、実際のゴールは重い荷物を持って移動する雷鳥荘であるのは毎度のこと。

## 雷鳥荘にて

部屋は新館できれいだったが、少し狭かった。部屋割りは予め書いた同室希望者通りとなった。Ｋ村さん、Ｉ井さん、Ｎ谷さん、やっほ～さん、がっつくん、もりけんさんと私の７名。女性陣も４人部屋で希望通りの居室となった。部屋に入って先ず目が付いたのは外の風景。特に雷鳥荘前、大日岳側の這松は枯



れたように真茶に変色、夕陽を浴びると茶色は濃くなり、松食い虫に食われたような感じで、一瞬紅葉が始まったようにも思える。地獄谷の活動が活発になり、硫黄で這松が枯れたようになっているのだ。雷鳥荘前の左側半分が特にひどいようだ。１年前とは大違いでショックを受けた。

早めに到着すると風呂の洗面がいっぱいで汗を落とすことに躍起になるが、１８時頃に風呂に行くとそれほど混んでおらず、すぐに洗い場を確保できた。その後は硫化水素泉に浸かる。硫黄の臭いが何ともいえない。温泉の下には「日本一高所２３００ｍにある源泉」がある。ここは通称「地獄谷温泉」というようだ。

温泉から上がり、１８時４０分から夕食。料理はいつも通りで、先ず生ビールで乾杯。陶板焼きの中身はカレーハンバーガーだった。腹が減っていたのでご飯を３杯も頂いた。やっほ～さんは体調が悪く、食

べられないようで、おかずはみんなで分け合った。２０時からは懇親会、男女１１人いるので席の確保が困難だったが、周りの人が場所を譲ってくれたので助かった。そんな時、W穂井さんから「ちょっと来ない」と言われ、座りに行くと先着が座られ、話することはできなかった。仲間達とアテを摘みながら、ビールや冷やの日本酒を飲み、楽しい時間が過ぎたかと思うといつの間にかお開きになっていた。

１時間半後、再び部屋に戻り、男性陣プラス、こがみちゃん、あつこさんも交えての３次会。N谷さんが発砲日本酒は気圧が低いと泡が一気に出るので、風呂桶で受けようということになって、あつこさんが女性風呂から風呂桶を取ってきた。それを敷いて栓を抜いたが、予め空気が少しずつ入っていたようで、泡が吹き出すことはなかった。吹き出した分は風呂桶で飲むという人もいた。

白濁の発砲日本酒はとても美味しく、懇親会会場から持ってきた清酒「立山」も美味しかった。“立山”で『立山』を飲む。最高だ。結局、２３時まで飲んで、その後は良い具合に眠れた。

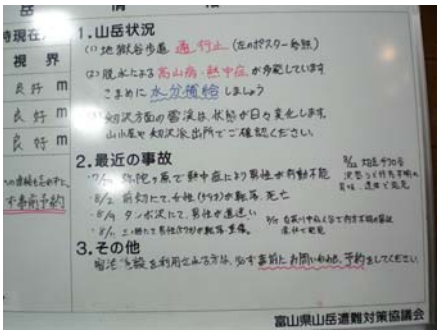
## 翌朝の雷鳥荘～室堂

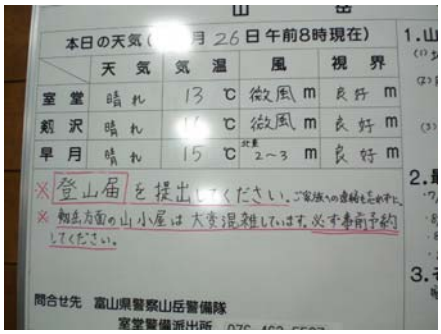
翌朝は４時に目覚ましを鳴らし、温泉に入った。熟睡できていたので爽快な気分だった。その後は肌寒い外に出て、立山三山や剱御前を眺める。まだ５時で少し明るいという感じだ。改めて、昨日往復したコースを辿ると大会では時間がないので無理だが、雄山から剱御前まで尾根歩きをしたいなぁ～と思ってしまう。改めて雷鳥荘の周りを見ると周囲の草木も枯れて、茶色くなった地肌がむき出しになっているのがわかる。昨年も若干茶色が掛かり始めていたが、この１年は地獄谷の活動が活発化し、硫化水素ガスがそれだけ流れて来て進行を早めたのだろう。

６時過ぎからはバイキング朝食。いっぱい取って、腹がパンパンになって食べきれないほど食べた。昨夜は調子が悪かったやっほ～さんも体調が戻り、朝からビールを飲まれていた。勧められたが、朝から酒という癖が付いていないので丁重にお断りする。その後は窓

越しにコーヒーを飲んで、ひと時の安らぎを味わう。

７時半頃に雷鳥荘を出発して、室堂バスターミナルに向かう。いつもは７時頃に出発していたが、ここ何年かはバス到着が遅く、早く行っても待たなければならないので３０分ずらした。強い日射しを浴びて、重い荷物を持ちながらのアップダウンは毎度のことながら堪える。上の方から雷鳥荘周辺を見ると周辺の草木が明らかに茶色に変色しており、向こう側の斜面とは全然違う。みくりが池温泉付近から見る地獄谷は硫黄で白くなっている部分が広まっているように思えた。風向きの関係か、雷鳥荘付近の茶色が目立つ。






「立山玉殿の湧水」を２本のペットボトルに汲んだ後、バスターミナルに行くとすでにバスは停まっており、席はかなり埋まっていた。２席確保は無理だったので、適当にバラバラで席を確保し、土産物を買う。うずらさんと babi さんは空港経由のバスに乗られた。私の隣の席は偶然にも昨日、千山荘で同部屋だった兵庫の方だったが、名前がわからない。

## 室堂からの帰路

「来年も逢いましょう！」というスタッフの元気なお見送りを受けて、下界へ出発。いつものことながら、室堂を去る時は朝早いので、もっと室堂の空気を吸っていたいという名残惜しい気持ちでの別れとなる。クネクネとしたヘアピンカーブが連続する立山有料道路を下って行くが、バスでも長く感じるこの道を上ったのも７回目となっていた。隣の兵庫の男性と話をしたり、外の風景を見たりしているうちに立山駅にバスは入り、数人を降ろした。ここから富山駅までは約１時間弱なので１１時には着くだろう。

市内に入ると空港経由のバスに乗ったうずらさんと babi さんは間に合うか、合わないかの瀬戸際で、みんな気になっていた。バスは１１時前に富山駅に着き、牛弁当と缶ビールを買い、１１時１６分発のサンダーバードに乗り込む。発車寸前にうずらさんと babi さんの姿が車内に見え、全員揃って帰れることになった。こがみちゃんは青葉

会の方々と車で帰られるので姿はなかった。
　サンダーバード内では昨日残っていた「立山」の一升瓶を取り出し、また宴会。誰の荷物の中に紛れ込んでいたのだろう？。昨日のつまみもあった。車内は空いていたとはいえ、８人で静かにしながら、また飲んだ。立山は何て美味しいんだ。こんなに最後まで楽しい立山は初めてのような気がした。飲んでほろ酔い気分になると寝て、何という贅沢だ。北陸トンネルを過ぎると敦賀。ここからの湖西線も結構長い。滋賀の南北は短いように思えるが、こうして電車に乗っているとそれなりに長く感じる。
　そうこうしているうちに１４時９分に暑い京都駅に到着。晩秋を思わせる立山から下界に下りるとまた猛暑到来といった感じだ。そして、１５時過ぎに帰宅できた。荷物が重く感じる。

## ８回目の立山を終えて

　今回初めて立山駅で宿泊したが、朝はゆっくりできるものの、何か物足りなさがあったのは、前日は旧知の仲間達と一緒に飲んで、冷房の効いたビジネスホテルの方が宿の相部屋よりは落ち着く。他人相手で気を遣うと疲れる。ただ、前日に長く寝られた分、雷鳥荘でこんなにも元気に飲めて楽しかったのは初めてだった。
　何といっても雄山山頂でＧＯさんとＦ川さんに会えたことが一番嬉しかった。こんなにも偶然にタイミング良くＧＯさんに会えるなんて。一度しか、それもほんのわずかな時間しか会ったことのなかったＦ川さんに名前を覚えてもらっていたこと自体、何か不思議な因縁に思う。ＧＯさんと何回も握手したが、あの感触は今も残っている。さくら道が縁でＧＯさんを知り、お互いに佐藤良二さんとさくら道を愛する人間として、さくら道の大きさをつくづく感じずにはいられない。そして、ＧＯさんとＦ川さんに再会できたからこそ、大汝山、富士ノ折立、内蔵助カール手前まで往復できた。もし、再会していなかったら、当初の予定通り、雄山を下山して一ノ越から浄土山と室堂山方面をオプションにしたと思う。素晴らしい思い出の立山となった。
　雷鳥荘の部屋割りも、みんな知り合いばかりで楽しい時間を過ごせたし、帰りのサンダーバードの中まで宴会は続き、ムチャクチャ楽しかった。清酒「立山」も美味しかった。
　今回も参加させて頂いたが、雲峰さんの例もあり、毎年リピーターだから何て甘く考えていると落選の道が待ち構えているとも限らない。そこは肝に命じて、来年も申し込もうと思っている。